

南琉球八重山波照間方言の 動詞形態論

国立国語研究所 麻生玲子

構成

1. 概要

- 動詞の下位分類
- 語幹クラス
- 屈折形式
 - ムード形
 - 時制形
 - 副動詞形
- 屈折接辞と派生接辞
- 接辞法以外の形態法

2. 分析するにあたり悩ましい点

- 属性動詞
- アクセントを持つ接辞（継続接辞・完了接辞）

動詞の下位分類

動詞：時制やムードといった文法範疇で活用する語類

一般動詞	属性動詞	
	ha 属性動詞	sja 属性動詞
jumi 「読む」	agaha 「赤い」	misjaha 「よい」
haki 「書く」	takaha 「高い」	sanisjaha 「うれしい」
he 「食べる」	maroha 「低い」	ke:sjaha 「きれい」
mu 「思う」	bu:saha 「大きい」	abarisjaha 「美しい」
arahe 「洗う」	isjagaha 「小さい」	o:sjaha 「青い」
iri 「入れる」	tu:saha 「遠い」	fu:sjaha 「黒い」
ndi 「出る」	sikaha 「近い」	siso:sjaha 「白い」

※属性動詞に関しては、悩ましい点①で後述する。

語幹クラス

接辞の異形態の実現形により、4つの語幹クラスに分ける。

	語幹	意味	交替語幹	後続する接辞の異形態 (例)		
				非過去接辞	否定接辞	副動詞接辞
クラス 1	jumi	「読む」	-	-u	-anu	-∅
	haki	「書く」	-			
	ngi	「行く」	-			
クラス 2	arahe	「洗う」	arasi	-∅	-anu	-∅
	nahe	「産む」	nasi			
	marahe	「死ぬ」	marasi			
クラス 3	iri(r)	「入れる」	-	-∅/-u	-unu	-a
	ndi(r)	「出る」	-			
	uti(r)	「落ちる」	-			
クラス 4	agaha(r)	「赤い」	-	-∅/-u	-enu	-i
	takaha(r)	「高い」	-			
	maroha(r)	「低い」	-			

※不規則語幹を除く

屈折形式

形態統語的に3つ屈折形式（語形）を認める。

1. ムード形

2. 時制形

3. 副動詞形

屈折形式①ムード形

1. 形態的特徴

- 唯一の必須要素として、ムード接辞が必須である。
- ムード接辞（5つ）：直説法接辞1、直説法接辞2、命令法接辞、意思法接辞、禁止法接辞
- 直説法接辞1, 2はムード接辞に加え、時制接辞も必須である。
- 終止形とも言える。

2. 統語的特徴

- 単独で主節述語として用いられる。

屈折形式①ムード形: jumi 「読む」 を例に

	ムード	時制	形式	意味	
クラス 1	直説法-n	非過去	jum-u-n	「読む」	
		過去	jum-uta-n	「読んだ」	
	直説法-o	非過去	jum-∅-o: ¹⁶	「読む」	
		過去	jum-utar-o:	「読んだ」	
	命令法			jumi-∅	「読め」
	意志法			jum-a	「読もう」
	禁止法			jum-una	「読むな」

屈折形式①ムー卜形: 例文

(6-3) 主節述語

a. sunu **sis-u-n.**

着物 着る-npst-ind

「服を着る。」

b. sunu **sisi.**

着物 着る.imp

「服を着ろ。」

屈折形式②時制形

1. 形態的特徴

- 唯一の必須要素として、時制接辞が必須である。
- 時制接辞：過去接辞、非過去接辞

2. 統語的特徴

- 単独で連体節述語として用いられる。
 - 単独で主節述語として用いられる例外的な環境がある。
- 時制形 + モーダル助詞の組み合わせで主節述語として用いられる。
- 時制形 + 接続助詞の組み合わせで副詞節述語として用いられる。

屈折形式②時制形：形式

	時制	形式	意味
クラス 1	非過去	jum-u	「読む」
	過去	jum-uta	「読んだ」
クラス 2	非過去	arasï-∅	「洗う」
	過去	arasï-ta	「洗った」
クラス 3	非過去	iri-∅/irir-u	「入れる」
	過去	iri-ta	「入れた」
クラス 4	非過去	agaha-∅	「赤い」
	過去	agaha-ta	「赤かった」

屈折形式②時制形: 例文①

(6-4) 連体節述語

jum-u pītu

読む-npst 人

「読む人」

(6-5) 主節述語

hi=gara **ndi-ta** sa:.

家=abl 出る-pst 推量

「家から出たよね。」

(6-6) 副詞節述語

usitu **nar-u=cja...**

年寄り なる-npst=条件

「年寄りになったら (頭痛は治る)」

屈折形式②時制形: 例文②

例外的に単独で主節述語として用いられる環境

(6-7) 係り結び・主節述語

uwa=ja agan=du **ho.**

豚=top イモ=foc 食べる.npst

「豚はイモを食べる。」

(6-8) 否定非過去・主節述語

ba: **ng-an-u.**

1sg 行く-neg-npst

「私は行かない。」

屈折形式③副動詞形

1. 形態的特徴

- 唯一の必須要素として、副動詞接辞が必須である。

2. 統語的特徴

- 単独で中止節述語として用いられる。
- 副動詞形 + 接続助詞の組み合わせで副詞節述語として用いられる。
- 副動詞形 + 補助動詞の組み合わせで補助動詞構文を形成する。
- 副動詞形 + 軽動詞の組み合わせで軽動詞構文を形成する。

屈折形式③副動詞形

	形式	意味
クラス 1	jumi-Ø	「読み」
クラス 2	arahe-Ø	「洗い」
クラス 3	ir-a	「入れ」
クラス 4	agahar-i	「赤く」

屈折形式③副動詞形: 例文①

(6-9) 中止節述語

midumu-nda=ja ina=ci **ur-a**, si:+pan **arahe**,
女-pl=top 海=all 降りる-連用 手+足 洗う. 連用

「女たちは海に降りて、手足を洗って、…（岩場を跳んだそうだ。）」

(6-10) 副詞節述語

za:=nu sima=n e:=nu sima=n ba: **mir-i=ba**, a-i dar-o:.
どこ=gen 島=も そう=の 島=も 1sg 見る-連用=条件 ある-連用 継続.npst-ind

「どんな島も、（土のかまどは）私が見る限りあるよ。」

屈折形式③副動詞形: 例文②

(6-11) 補助動詞構文の主動詞

<zikan> ku bagi=n **maci** bir-ja-tar-o:.
時間 来る.npst 限界=も 待つ. 連用 継続-dur-pst-ind

「時間が来るまで待っていたよ。」

屈折接辞と派生接辞：承接順序

ムード形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞 可能接辞	継続接辞	過去接辞	直說法接辞
			完了接辞 否定接辞	非過去接辞	
			命令法接辞 意志法接辞 禁止法接辞		

時制形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞 可能接辞	継続接辞	過去接辞
			完了接辞 否定接辞	非過去接辞

副動詞形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞	否定接辞	副動詞接辞
		可能接辞		

屈折接辞と派生接辞：承接順序

ムード形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞 可能接辞	継続接辞	過去接辞	直説法接辞
			完了接辞 否定接辞	非過去接辞	
			命令法接辞 意志法接辞 禁止法接辞		

時制形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞	継続接辞	過去接辞
		可能接辞	完了接辞	非過去接辞
			否定接辞	

副動詞形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞	否定接辞	副動詞接辞
		可能接辞		

※語の成立に必須の接辞を屈折接辞と呼ぶ。

屈折接辞と派生接辞：承接順序

ムード形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞 可能接辞	継続接辞	過去接辞	直説法接辞
			完了接辞	非過去接辞	
			否定接辞		
				命令法接辞	
				意志法接辞	
				禁止法接辞	

時制形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞 可能接辞	継続接辞	過去接辞
			完了接辞	非過去接辞
			否定接辞	

副動詞形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞	否定接辞	副動詞接辞
		可能接辞		

※すべての屈折形式で語幹を拡張する接辞を派生接辞と呼ぶ。

屈折接辞と派生接辞：承接順序

ムード形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞 可能接辞	継続接辞	過去接辞	直説法接辞
			完了接辞	非過去接辞	
			否定接辞	命令法接辞 意志法接辞 禁止法接辞	

時制形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞 可能接辞	継続接辞	過去接辞
			完了接辞	非過去接辞
			否定接辞	

副動詞形：

語根（+語根）	使役接辞	受身接辞 可能接辞	否定接辞	副動詞接辞
---------	------	--------------	------	-------

※継続接辞と完了接辞は、屈折・派生という議論からは除外。

屈折接辞と派生接辞

- 語の成立に必須の接辞を屈折接辞と呼ぶ。
- 語幹を拡張する接辞を派生接辞と呼ぶ。
→継続接辞と完了接辞は、屈折・派生という議論からは除外。

継続接辞と完了接辞を議論から除外する理由

- 使役接辞、受身接辞、可能接辞、否定接辞とは異なり、副動詞語幹を拡張できないため。継続接辞と完了接辞は、おそらく歴史的に副動詞形式＋別の動詞が融合して生じた形式である。
→悩ましい点②で詳しく述べる。

接辞法以外の動詞形態法①

【複合】

複合：語根 + 語根

※生産的なのは、一般動詞語根 + ha属性動詞の構造。
「～したい」「～してよい」がある。

(6-101) a. ho-n(N)

食べる.npst-ind1

「食べる」

b. he+bo(N)ha-n(∇)

食べる + 願望.npst-ind1

「食べたい (おなかが空いた)」

※アクセント単位：前部要素の動詞語根と、ha属性動詞の前部アクセント単位で1アクセント単位を成す。

接辞法以外の動詞形態法②

【重複】

重複：共時的には認めない。歴史的には認められた可能性がある。

(6-109) ke:ke:sja-n.

とてもきれい.npst-ind

「とてもきれいだ。」 cf. ke:sjaha 「きれいだ」

※見つかった例は、この3語のみ

(6-110) sani:sanisja-n.

とてもうれしい.npst-ind

「とてもうれしそうだ。」 cf. sanisjaha 「うれしい」

(6-111) ni:ni:sja-n.

とても似ている.npst-ind

「とても似ている。」 cf. ni:sjaha～nisisjaha 「似ている」

分析するにあたり悩ましい点①

【属性動詞】

- 属性動詞の内部に、化石化した句構造が観察される。
 - 歴史的には句
 - 原則は1語に1アクセント単位だが、属性動詞は2アクセント単位観察される。
※サアリ型・クアリ型に関しては、名嘉真 (1992), かりまた(2009)を参照されたい。

(3-9)	/aga\ha\]	「赤い」
	/ma:tha\]	「美味しい」
	/maro/ha\]	「低い」

波照間方言のアクセントは三型

- 下降型：アクセント単位末尾に向けて下降する。/\]/で表記。
- 平進型：下降も上昇もしない。/\]/で表記。
- 上昇型：アクセント単位末尾に向けて上昇する。//]/で表記。

分析するにあたり悩ましい点①

【属性動詞】

- 動詞と分析する理由

- 共時的には自立語が2つ並ぶ「句」というほど自由ではない（アクセント境界に焦点助詞などを挿入することはできない）。
- 活用語尾が一般動詞と同じである。

内部構造に関して、2アクセント単位を1つの（複合的な）語幹と分析する。なお、複合的な語幹の前部のアクセント単位は、PC語根（Shimoji 2008など）と言える。

分析するにあたり悩ましい点② 【アクセントを持つ接辞】

hev 「食べる」

iri^ˈ 「入れる」

hjan 「食べている」

iran 「入れている」

hjan 「食べ終わった」

iran 「入れ終わった」

jumi^ˆ 「読む」

jumjan 「読んでいる」

jumjan 「読み終わった」

※調査不足の点はあるものの、
アクセントを分解できる。

分析するにあたり悩ましい点② 【アクセントを持つ接辞】

- 由来となる形式：副動詞形 + a(r)
 - jumi+a→jumja, iri+a→iraなど。
- 句構造（補助動詞構文）を由来とするので、派生接辞とは異なり、副動詞形の語幹を拡張できないことが説明できる。従って、屈折・派生の議論から除外する。

分析するにあたり悩ましい点② 【アクセントを持つ接辞】

- 継続接辞、完了接辞の由来となる形式、a(r)に関して、2つの仮説がある。
 - A) a(r)はどちらも存在動詞「ある」。融合した時代のアクセントがそのまま引き継がれた (Lau 2014)
 - B) 完了接辞は存在動詞「ある」。継続接辞は存在動詞「いる」bu(r)である。

分析するにあたり悩ましい点②

【アクセントを持つ接辞】

- 仮説①
共時的に観察される形式：ja:~ja(r), a:~a(r)が説明できる。
一方、継続接辞と完了接辞の成立順序については不明。
→共時的には存在動詞「ある」は平進型であるので、下降型の継続接辞が先に成立？
- 仮説②
周辺の八重山方言と並行的に分析できるため自然。
アクセントも合致する（「いる」は下降型、「ある」は平進型）。
一方、音韻変化についての証拠が不十分。（u>a）。

※なお、石垣四箇方言（鈴木2001）のように、焦点助詞を介入させるような完了の迂言的な表現は波照間方言では見つかっていない。

参照文献

かりまたしげひさ (2009) 「波照間方言と与那国方言の形容詞語尾を言語接触からみる」, 『南島文化』, 第 31 巻, 1-10 頁, 沖縄国際大学南島文化研究所紀要.

Lau, Tyler (2014) “Aspectual Distinction via Pitch Accent in Yaeyama,” 8, presentation material for 14th European Association of Japanese Studies International Conference in Ljubljana, Slovenia.

名嘉真三成 (1992) 『琉球方言の古層』, 東京: 第一書店.

Shimoji, Michinori (2008) “A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language,” Ph.D. dissertation, The Australian National University.

鈴木重幸 (2001) 「琉球八重山方言の動詞の研究—石垣方言の動詞のアスペクトとテンス (中間報告) —」, 平成 11 年度～平成 12 年度, 研究成果報告書.